

随筆

各地の水辺を訪ねる-4

山形五堰

亀田 泰武*

1. はじめに

山形五堰は扇状地に位置する山形市中心市街を放射状に分水しながら流れる用水路で南から「笹堰（ささぜき）」・「御殿堰（ごてんぜき）」・「八ヶ郷堰（はっかごうぜき）」・「宮町堰（みやまちぜき）」・「双月堰（そうつきぜき）」の5つが並んでいる。

通常こういう水路は用水と呼ばれるが、ここではなぜか堰と呼ばれている。

昭和の始めまで農業用水だけでなく、生活用水、水車利用の工業などに利用されていたが、高度成長期に生活排水や工場排水の急増により、水質が悪化。また、自動車交通量の増加などによって、石張りの水路からコンクリート水路になったり暗渠化したりして味気ないものになっていった。

下水道の整備によって清流が復活し、現在その価値が見直され、一部復活している。

山形五堰を取材したのは2013年春で、山形城の桜が満開で、天気予報が良い日に合わせて出かけたが、昼

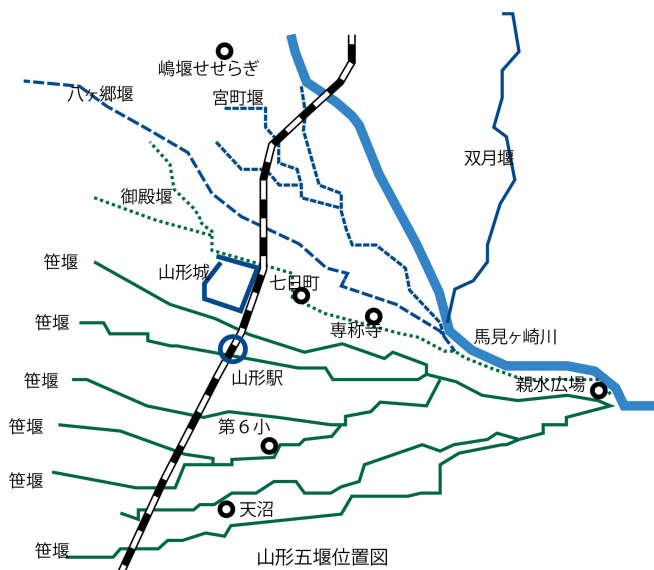
前から曇ってしまい、良い写真の数は限られてしまった。

2. 歴史

残念ながら五堰が造られた当時の文献や資料は現在のところ発見されていない。1854年（嘉永7年）の「嘉永七年出府の節御奉行江書上」（旧今塚村丹野家所蔵）に1623年に5日間降り続いた大雨で洪水が起き、翌1624年に当時の山形城主の鳥居忠政（とりい ただまさ、1566～1628）が馬見ヶ崎川の流路を変更する工事を行い、この工事にあわせ城濠への水の供給と生活用水・農業用水の確保のため、馬見ヶ崎川に五箇所の取水口を設けたとある。このとき忠政は58才であった。

鳥居忠政は戦国時代にあつて徳川家臣の武将として、徳川家康に従い、1584年の小牧・長久手の戦いに参加した。

1600年に父の元忠が伏見城攻防戦で討死し、家督を継ぎ、下総矢作藩主（千葉県香取市あたり）となった。関ヶ原の戦いの際は家康の命令で江戸城留守居役を勤めていた。戦後に父の戦功によって陸奥磐城平に10万石を与えられている。



五堰図面



御殿堰 専称寺境内。山門を入ってすぐの所

*KAMEDA Yasutake, (NPO)21世紀水倶楽部理事長
URL <http://www.mizumirai.net/sitema/>

二度にわたる大坂の陣でも江戸城の留守居役を務めた。常に留守番役を命ぜられるというのはいかに家康の信頼が厚かったか想像できる。1622年に、最上氏が改易された後を受けて出羽山形22万石に加増移封され、妹婿で新庄藩主戸沢政盛、娘婿で鶴岡藩主酒井忠勝らと共に、徳川氏の譜代大名として伊達政宗などの東北諸大名の監視を命じられ、1628年山形で死去。

三河の武将が、56才でなじみのない北国に赴任したばかりの災害に対し、このような大事業を実行したことになり、ちょっと不思議な感がある。この頃を調べてみると名君、最上義光（もがみ よしあき1546-1614）の名前が出てくる。義光は、戦国時代から江戸時代前期にかけての出羽国大名で最上氏第11代当主。伊達政宗の伯父にあたる。関ヶ原の戦いにおいて東軍につき、最上家を57万石の大大名に成長させて全盛期を築き上げた

江戸幕府成立以降、義光は領内の復興に尽力した。自国の民に対して非常に寛容であり、義光存命中は一揆もほとんど起きなかったと云われる。

山形城を改築し、居城として広大な平城に拡張するとともに、城下町の整備に取りかかった。まず、商人町を整備するため、山形城下においては地代・年貢を免除し、間口四間半から五間、奥行三十間を基本とした土地を分け与えるとともに、羽州街道・笹谷街道沿いに定期市を設けた。さらに上杉から奪い返した酒田港を最大限に活用すべく、庄内から山形へ通じる二本の街道を改修・拡幅するとともに、最上川の難所を開削して水運の安全性を高め、領内の流通を盛んにして藩財政を大いに潤した。また職人町は「御免町」として諸役が免除され、職人の中には家臣並の待遇を受けた者も居た。当時の町数は31、町屋敷は2千を超え人口2万人にもなった。これに家臣団を加えると人口は3万人を超えた。

農政面では、治水工事を積極的に推進し、北楯大堰・因幡堰などの疏水を開削して用水問題を解決し、庄内平野の開発を進め、農業生産力を大きく向上させた。最上義光時代に築かれたこれらの疏水は、今なお庄内平野を潤し続けている。

国頭として11代にもわたり治め、このように発展させた国が義光死後、跡目相続のごたごたが続き、9年しかたたないうち、1万石に改易されてしまった。

このようなことから最上義光が進めた領内の農業用水の開発が山形五堰の建設に生きたと思われる。青写真までできていたのでないだろうか。



馬見ヶ崎川
月山方向。堤防に桜並木。

3. 馬見ヶ崎川

山頂部の樹氷で有名な蔵王連峰に源を発し北西に向かう。山形市街地東側を流れ、山形市長町・七浦付近で野呂川及び村山高瀬川と合流して白川となり、大字成安付近で須川に合流する。延長は約18.2km。

山地から平野部に入るため扇状地を形成する暴れ川で、扇状地を流れる間に多くが地下浸透し、扇状地末端で湧き出している。

暴れ川の治水対策と、上水道水源確保の目的で蔵王ダムが1965年に予備調査を開始し、県事業として1970年に完成した。

馬見ヶ崎川は山形市内で河川敷が広くなり、堤防は桜並木となっている。親水公園もあり、河川敷は日本一の巨大な大鍋を使った芋煮会場となっている。

4. 山形五堰

五堰は、かつて各々が堰と取水口を持っていて、これが用水でない堰という名の由来らしい。1985年、馬見ヶ崎川合口頭首工が供用開始し馬見ヶ崎川からの取水が1ヶ所に統合されている。堰は扇状地を枝分かれしながら流れ、総延長は115kmといわれるが、昔の石積水路が完全な形で残っているのは8キロメートルのみ。貴重な石積水路を守るとともに、近年はコンクリート水路から石積水路への改修や補修が行われている。

このように昔の水路が見える形で残っているところはあまりない。

扇形に広がって分かれて流れるが、笹堰の分水が一番多い。馬見ヶ崎川が形成した扇状地の約2/3の区域を7本に分かれながら流れている。他の堰は扇状地内では1～2本の分水である。いくつにも枝分かれしている笹堰であるが、南から2本目のものは、馬

見ヶ崎川の南を流れる恥川の流路にほぼ沿っていて、ため池である天沼は恥川の水も流れ込んでいると思われる、その南の分水路も龍山川が入っているような感じがする。

以下水路が残っているところを紹介する。

5. 専称寺山門近く

山形城（霞城）に向かう御殿堰が山門を入ったすぐの所、墓の中を流れていて、石積みの昔のままのように見える。この付近は寺町となっている。専称寺は浄土真宗大谷派の寺院で、当初は天童市の願行寺であったが、最上義光が専称寺と改め1596年頃に山形城下に移した。これは義光の次女駒姫の菩提を弔う為で境内の東北端には墓がある。駒姫は当時15歳で豊臣秀吉の養子になった秀次の侍妾となり1595年に上洛した。しかし、秀次は関白の位にのぼったものの、秀吉の実子である秀頼が生まれた為、半ば排斥されるように高野山に流され切腹、駒姫も連座され三条河原で処刑されてしまった。

現在の本堂は1703年に再建された非常に大きい木造



専称寺本堂

建築物で、屋根四隅には左甚五郎が彫り上げた彫刻がある。ただ運営が厳しいのか、閉まっていた、残念ながら傷みもあちこちに。

6. 七日町御殿堰

専称寺の下流、中心市街のなか、2010年に再開発され御殿堰が保存されているところである。

広い遊歩道の真ん中を整備された堰が流れ、回りは土蔵や木造のレトロでおしゃれな店や喫茶店、寿司どころ、そばやなどが並んでいる。

残念ながら、水路は50mくらいしかなく、上流の水路は民地に挟まれていて、水路に沿った小径はない。

7. 御殿堰中央親水広場

七日町御殿堰のちかく、市立病院済生館の隣にある大規模な現代的なせせらぎで、つつましい山形五堰に合わない大きさ。丁度清掃作業中で水が流れていなかった。



御殿堰中央親水広場 山形市立病院済生館のとなりに



七日町御殿堰



御殿・八ヶ堰親水広場

8. 御殿・八ヶ郷堰親水広場

取水堰に近い上流に堰の水を引き込んだ公園で、すぐそばは馬見ヶ崎川の堤防となっている。桜も見事であった。

9. 第六小学校横

桜並木が美しい小学校横の道路に沿って笹堰の分流が勢いよく流れている。小学校の中にもせせらぎが設けられている。

10. 天沼

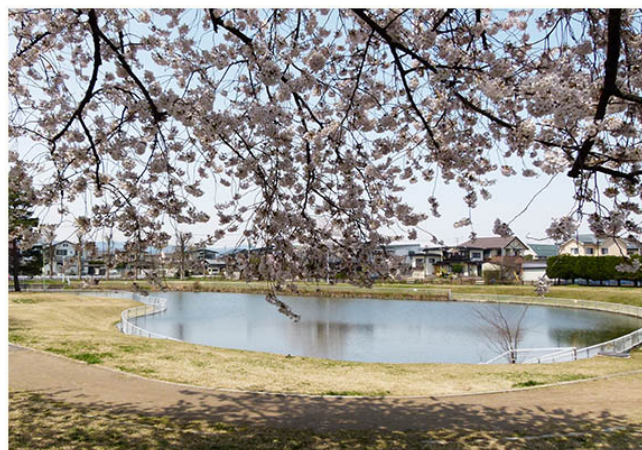
普通ため池は池だけで殺風景な所が多いが、ここではため池の回りに芝地が広がり、みなみ公園となっている。下流の灌漑に使われている。

11. 嶋堰せせらぎ緑道

山形駅から北に約3kmのところ。嶋地区の水田地帯の区画整理事業を行った際、宮町堰の下流にあたるのでせせらぎを整備したもの。公共下水道雨水幹線を大きな暗渠とし、上部にせせらぎと緑道を設けている。



第六小学校横



天沼



嶋堰せせらぎ緑道

平成21年完成。せせらぎは浅く幅広く流れるように設計され、一般的なせせらぎと違う流れになっている。

山形五堰は、水路沿いに歩道がないところばかりであるが、ここでは水路沿いに遊歩道が設けられ、所々に四阿があり、散歩ができるのが良い。

12. 大坊川せせらぎ緑道

山形五堰からははずれるところにある。笹堰の南、山形駅から約2km南の所を流れている大坊川の掘り割りを改修し、地下に雨水幹線を設置し、地上をせせらぎのある900mの緑道にしたもので、平成13年にできあがった。この辺は恥川、龍山川、坂巻川など、馬見ヶ崎川の南に並んで扇状地を形成している。このせせらぎは、嶋堰せせらぎと同様に、浅く、広い流れになるよう設計されているが、上流の方は水路にしてはけっこう勾配があり、さざ波がたっていてせせらぎを感じさせるようになっている。せせらぎの脇は割に広い緑道になっていて、散策に良い。



大坊川せせらぎ緑道 上流部。向こうは蔵王に連なる山並み



山形城の桜 濠の向こうに奥羽本線が走っていて列車からの眺めも良い

13. 終わりに

五堰にせせらぎが戻り、保護活動がみのってきて、梅花藻（ばいかも）が多く見られるようになってきた。梅花藻はキンポウゲ科の多年草で、6月から秋口にかけて小さく可憐な花を咲かせる。

五堰の水路延長は長く、扇状地で地形勾配があるので流水も速く、生き活きと流れるが、水路脇の小径が



大坊川せせらぎ緑道 中流部



嶋堰せせらぎ緑道-2 住宅街の中を流れる

ほとんどないのが残念である。1つでも郡上八幡のいがわ小径のように、水路沿いに狭い歩道があったらと考える。

嶋堰、大坊川せせらぎ緑道は、脇に歩道があって地域の財産となり、いいのであるが、設計が現代的になっている。

どこかに五堰の雰囲気を出してもらえる小径つきの石積み流れがあるとありがたい。

参考

1. 山形県庁ホームページ
2. ウィキペディア 最上義光